



行駛日七月三日

(刊休翌日祭曜日)

詩南社主 催第四回 短歌會詠草

『風』

(一)

きさらぎの風にたさうの音ゆる橋のたとの猫
柳の花

一夜寝る友の書院の窓近く月夜竹林風にさや鳴る

遠藤時雄宅

秋風流る

と小さきすきもあるらむかせの夜は灯にきらめ

きて粉雪のとぶ

ふきぬる

夕秋

鳥見ゆ

春風は自動車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風の終日強くふきたれば我が手は荒れて血の

ふきぬる

梅が香かあらず彌生の息づきが我ほゝのへをなで

よぎる風

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

に吹かれぬ

桜見ゆ

春風は自転車が撒く赤や黄の講演會のビラ舞はし

樹見ゆ

春の風入らば入れよと口あいて物見ヶ岡にわれ立

赤井 嶽夫

雪まじり吹きつける風の田の中にさむく立てる

戸部 曙月

映畫見人のいきれに耐えかねてしばしは窓の風

月曜論壇

磐中卒業生諸君

盤五年の功を経てけふ

高月を築立つ健兒二百の卒

業後に於ける志望を見るに

各々其の好む處に從つて宏

遠の理想を有し一として意

圖の壯ならざるは無いが而

も理想は既に理想であつて

之を現實するに果して如何

なる程度の確率を有するや

は遂に判断の正鵠を望み得

ぬ處であつて、而も輝かし

い希望を以て追憶の學窓を

出た若き人々が蹉跎として

悔はず再び還らぬ若き日を

慢然として他ばまれつあ

る蒼白き青年が世上如何に

其の類例に當めるかを念ふ

時、卒業生諸子の前途を祝

福する一面また或る種の暗

黙の之に伴へるを感知され

る。由來溫室を出た花は萎

み易い、諸子にして萬一卒

業の歡喜に醉り晴れやかな

半面のみを空想して所謂

慘風悲雨荆棘徒に多さ人生

行路難の認識を誤るが如き

事あらば堪へ難き幻滅の悲

哀を満喫せねばならぬ事に

なるやも未だ以て測り知る

べからざるものがある

茨城ごは軒轅

士の事件が既に人をして

驚心駭目にはげざらしむ

るものある處へ、其の下手

人が意外にも同郷同窓の白

面青年なるに至つては、世

界にその前例絶無なるか或

は少くとも極めて稀有の事

實と稱すべく殊に之種の不

退済を出した茨城縣に隣る

天地に住む吾人の均しく悚

然たらざらんと欲するも能

はざる處である。而も吾人

居る次第に御座候、然るに

事もとより國家の危急かくまで御配慮を相頼はし

敵は猛烈な射撃した

敵は死の山作にて恐れ

して寧ろ小兵一死以て國恩

に重且大なるものあり、其他に就て座談會を催すと

國民精神の作興に努め國

力の培養を圖らざるべか

の倫安をも容さざるもの

あり、舉國一致協力して

農家經濟座谈会鹿島村

に重且大なるものあり、其他に就て座談會を催すと

國民精神の作興に努め國